

# 山びこ通信

Vol.1

2003.7.14

## 「山びこ通信」創刊について

- 本日も届けする「山びこ通信」とは、「山の学校」から各ご家庭にお届けする「山びこ」(エコー echo) のようなものです。
- 今回は、「1学期を振り返って」というテーマで3人の先生に授業の様子やその内容について語って頂きました。
- 授業にかける先生の思いや、クラスの雰囲気を少しでも感じ取っていただければ幸いです。また、ご感想やご意見等をお聞かせ頂ければありがたく存じます。

## 「お知らせ！」

「山の学校」では、平成15年度2学期会員を募集中です。

1学期との相違点は、次のようなものです。

### 1 小学校の部の時間について

開始時間を4時10分とし、終了時間も5時10分とする。(他のクラスは1学期のままです)。

### 2 「カプラ教室」(小学校の部)について

- (1) 希望者は毎回自由に参加できるものとする。参加資格は「山の学校」会員でなくても可。
- (2) 参加希望者は、1回500円、5枚綴りの回数券2000円をお求め下さい。

### 3 「ひねもすクラブ」の創設

月曜日、4時～6時。参加資格は「山の学校」会員、参加費用は無料。

「ひねもす」は(株)コトの開発した新時代のおもちゃです。どのような遊びなのか、コトからのメッセージをお読み下さい(最終ページ)。

### 4 夏休みを利用したの“スペシャルイベント”として…

8月26(火) 「ワクワク探検教室」

27(水) 「ことば」の朗読会 / 「2000年前の科学論」

28(木) アリ博士の山岡亮平先生のお話 / 「英語で遊ぼう！」

29(金) 「ひねもすで遊ぼう！」 / 「ラテン語の夕べ」

を予定しています。詳細は、2学期会員に別途ご連絡します。

# 『ことば』 山下一郎（ことばクラス担当）

山の学校の“ことばの教室”がスタートを起こしてから、ほぼ3ヶ月経過しました。

53年間の園生活の経験はあるものの、小学生相手のことば指導——作文指導は全く初めてのことで、何からどう手をつけたものかと戸惑いながらも、私が日頃日本語に対して抱いている思いと、長年の幼児との触れ合いから得たものをミックスさせながら、学校でもなく、塾でもない、オリジナルなことば教室の創造に向けて、焦らずじっくりと取り組んで行こうと心がけて、今日に到りました。

- 作文教育の前にまず手掛けましたことは、友達の前でのお互いの口頭発表でした。口頭発表と作文との相関関係を意外に思われるかも知れませんが、人前で発表するということは、頭の中の原稿用紙に、伝えたいことを刻々と纏めながら綴って行く、かなり難度の高い作業でして、この原稿用紙のない作文は、原稿用紙に書く作文のように書き直しが効きません。  
言い直しはできますが、かっこよくありませんから、誰も避けたいところです。ですから初めは原稿用紙でいえば、ほんの2行か3行程度の発表に止まっておりました。しかし、自己紹介から始まって、自分の生い立ち、自分の名前の由来など、回を追うごとにお互いに打ち解けてきたせいもあってか、何回目かに行った、ご両親にはナイショで“お父さん、お母さんのステキなところを見つけてくる宿題”の発表の折りには、生き生きと得意げに、しかも、けっこう時間をかけて伝え合うことが出来ました。
- こうして、鉛筆を持たない作文、口頭発表による作文のトレーニングを重ねる一方、話の読み聞かせ（初めの間は紙芝居の鑑賞）も毎回行ってきました。そのつど、あとで感想文を書いてもらっていますが、これも、現段階では作文教育で求められる、細かい言い回しや“てにをは”などにはあまりこだわらず、話の内容をどれだけ的確に把握できたか、その内容を、ひとりひとりはどう受け止めたか、どう感じたか、といった観点に重きをおくことにしております。  
文法にとらわれないためか、自由な発想で個性豊かに感想が述べられておりますので、どの生徒の感想文にも褒めるべき箇所が、必ず1、2箇所は見出せます。そこを称揚します。認められることは自信につながり、次のやる気へと発展します。  
先ずは、書こう！ 書きたい！ の気持ちを持ってもらうことが先決なのです。と同時に生徒達は、感想文をあとで書く必要もあって、話を聞くときは目を閉じて静かにところを集中させながら、静寂の気配にひたっています。このような雰囲気、現代の子ども達はどれだけ味わっているでしょうか。
- 一方“ことば遊び”と称して、学年ごとに押さえておいてほしい、漢字の読み書きなどを含めた国語の基礎的な問題点と、ゲーム感覚で楽しく取り組んでもらうため、毎回、各学年毎の問題の作成にも腐心しております。

だいたい以上が、“ことばの教室”のこれまでたどってきた主な経緯ですが、土砂降りの日も、遠足でくたびれたその日も、山道を勇んで駆け上がって来る生徒達の元気な姿に接しますたびに、また次の週への“お話し”や“問題作り”に意欲を燃やしている今日この頃です。

# 『ことばの風景』

福西亮馬（ことばクラス共担）

## 『さんご』——さんごの物語

海はとってもきれい。  
だけど、ひとでは、ぼくのとてき。  
だって、ひとでは、きれいなさんごを食いあらず。  
だから、ひとでは、きらい。  
さんごは、ふやしても、すぐに  
ひとでに、食べられちゃうんだ。  
でも人間たちは、さんごをきれいだな、  
きれいだなんて、見てくれている。

これを書いてくれたのは、実は三年生なのです。三年生は、このクラスでは「年少」の存在です。しかし一度文章となったものは、作者の年を超えた存在感を持っているのです。

「この詩、だれが書かあったの？」

と案の定、五年生が聞いたので名前を言うと、「えー？ 本物(プロ)の人が書いたのかと思った」という反応が返ってきました。私は、驚きました。あまりにも期待通りの声だったからです。そして、わざと「詩」とは断らなかったのに、五年生の子には、それが「詩」だと認識されたのです。

クラスに一人、いつも時間内に作品を仕上げるという特技を持った子がいます。その子が、今日も「できた」と言って書いた紙を持ってくると、こう言いました。「まだ時間があるし、詩を書く」と。私は二度驚きました。三年生の子に、五年生の子が触発されたのです。一方、当の三年生の子は、こつこつと「ありの一日」という文章を綴っている…。

## 『雲』

雲っていいな  
ふわふわして 見ている  
人のこころを あたたかくしてくれる  
とっても やさしい気持ちが 表現されている  
みんなも 雲みたいな  
あたたかい人になっしてほしい

(五年生の作品)

なんて素晴らしい子どもたちだろう！ もしクラスの中に、(初めての) 発表作を冷やかしたい気持ちが抑えきれず、ことばをその目的に使ったなら、こんなことは起こらなかつたでしょう。三年生の子が『さんご』の次に、『ありの一日』を書き、五年生の子が『雲』を書くということは、ここには、子どもたちがことばを守る雰囲気があるのです。

子どもたちがクラスを作っているのです。

# 『しぜんだより』

山下育子（しぜんクラス担当）

いつの頃からでしょうか。こどもたちが年齢を越えてみんなで花を摘んだり、木の実を見つけとって食べたり、川に足をつけてメダカの群を追いかけたり、不思議なものを探したりしなくなったのは……。自然の中にある美しく神秘的なものを子どもたちと見つけ分かち合いたい！毎回テーマを設定し、1学期はお山の周辺を楽しんでいます。

## “自然と遊ぼう！”——ある4月のクラス

茶色っぽいもの5つを見つける

ちがうにおいのするもの5つを見つける

色のちがうもの5つを見つける

ビニールやプラスチックでできたもの5つを見つける

手触りのちがうもの5つを見つける

こんな紙に書かれた問題とビニール袋を片手に、お山のまわりを探しに出かけます。

「あっ、この葉っぱ裏がザラザラや」 「表面に毛がついてフワフワしてる」  
「あっ、クサイ！何これ？」 「ドクダミの葉！干してお茶にできるわ！」  
「これ、ヨモギ。きず薬になる？」 「ヨモギだんご食べたい！」

皆のキラキラした目が次から次に発見していきます。草の茂み、ドングリやクヌギの木の下、砂の上……。目を見張ると普段見えないものも見つけられます。  
——教室に戻ると、ひとりひとりの収穫物を机に広げ発表です。いつの間にやら春の珍しいキノコ“アミガサダケ”を採った子。

「よく見つけたね」 「それ、食べられるの？」  
それぞれの発表に皆で大拍手です。

この日、Kちゃんが宝物の“アカハライモリ”を連れてきてくれました。  
「ほら、お腹をひっくり返すと赤い色してるから、アカハライモリっていうの」とKちゃん。  
「すごい」 「どこにいてるの？」  
「もらったんだけど、近くの川」 「イモリとヤモリと何が違うの？」

\* 図鑑を広げて調べながら、大切な“お客さん”を皆で拝見したひと時でした。

## “ひみつの森へ行こう！”——ある5月のクラス

この日は春の光がキラキラするとともに爽やかな午後でした。

「幼稚園のてっぺんから道がずーとつづいていて、山の奥へ行けるんだけど行く？」  
「やったー！！」  
「行こう！」

そこでまた問題。



**問題 1** 森の中の好きな場所で1分間目をとじてまわりの音に耳をすませてごらん？ どんな音がきこえてくるかな？

**問題 2** 足元に何が落ちていた？

**問題 3** 花を見つけてごらん？ どんなにおい？ 花びら何枚？

飼育ケース片手にワクワクドキドキでスタート！ 松ぼっくり、サルノコシカケ、カラスの羽、ドングリ、腐った木の幹・・・ほかにもいっぱい集めて帰りました。

「白い花があったよ」 「花びらは何枚？」 「数えられない」  
「立ち止まってどんな音がした？」 「カラスの声」 「遠くで犬が吠える声」  
「木の葉が風でサワサワゆれる音」 「海辺の波の音」

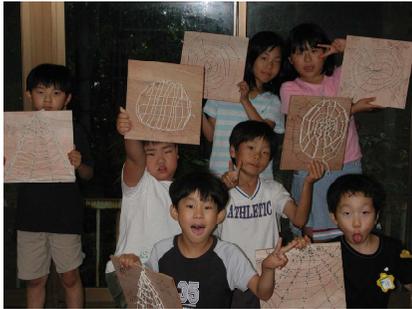
\* 山奥の自然のふところに身をおくと、子どもたちの心はセンス・オブ・ワンダー(自然の美しさと神秘を感じとれる心, 感覚, 喜び)であふれます。心のやわらかな小さな頃に、たっぷりと自然を仲間と一緒に共有し、豊かな気持ちがどこまでも満ちることを祈ります。

## “スパイダーウェブ” クモの巣づくり——ある6月のクラス

梅雨の真ただ中で雨ばかり。そんな雨の中でも黙々(モクモク!)と獲物をとるために巣を編みつつけている「クモ」。

いちどそのクモになったつもりで“クモの巣”を張ってみましょう。

- ① 板に巣の絵を描く
- ② 糸と糸の交点にクギをうつ
- ③ たこ糸をクギに引っかけ編んでいく



人間のクモの巣張りは2回にわたり、苦勞の末完成しました。完成後、外へ出てクモの巣考察タイム・・・。

「クモは雨の日はどこにいる？」  
「巣に息をふきかけてみる？」  
「ちょっと小枝でつついてみたら」  
「きり吹きで水をかけると巣の形がよくわかるかも」  
「巣がこわれても、あつという間にたった一人で作り直すクモはすごいね」  
「糸はまずたて糸から張って、つぎにベタベタするよこ糸をうずまき型に張るんだって」  
「それに獲物がつかまるんだ」  
「巣を張らずにエサを探し回るクモもいるよ」  
「ミズグモはきれいな水の中に、糸で空気の部屋をつくってすむんだって」

\* 人間がクモのかわりに巣を張ることの難しさ、大変さに加え、クモの糸の伸縮性、獲物をとらえられる強度など、人工ではまねのできないクモの世界を垣間みました。

——5月のしぜんのクラスが終わったあと、クロオオアリの女王アリにお山の石段で出会いました。きっとオスアリと空中結婚飛行を終えて産卵場所を探して歩いているところでした。羽を落としたところの大きくりっぱな女王アリに私は生まれてはじめて遭遇しました。是非とも飼育ケースに入れて産卵の様子を見たかったのですが、神聖なものを感じ、結局デジカメに収めるだけにしました。

8月28日(木)には、お山の幼稚園の卒園児で、アリの専門家、山岡亮平先生をお招きして子どもたちも興味深いお話を聞ける機会があります。とても楽しみです。

## ～ちょっと古くて新しい遊び「ひねもす」～

——おもちゃ会社『コト』からのメッセージ

ビー玉、めんこ、ペーゴマ、陣取ゲーム、六むし、もやし、警察鬼ごっこ。私の少年時代には、自分たちで工夫して遊びを生み出していくための「遊びの素材」があふれていました。友達との間でルールを作り、作り出したルールで自ら遊ぶ、そして、遊びながら社会性を培っていく。遊びを中心とした良い循環があったのだと思います。

翻って、昨今では、キレる子ども、学級崩壊が大きな社会問題となっています。この一因として子どもたちが「遊びを中心とした良い循環」を体験する機会が減っているのではないかと私どもは考えています。

「ひねもす」は、幼少の子どもたちだけで遊ぶには、少し難しいかもしれませんが。そんなときは、どうぞ、子どもたちと一緒に、ひねもすで遊んであげてください。マジックハンド、めがね、剣、人形、いろんな造形物を子どもと一緒に作ったり、子ども同士で造形物を見せ合ったりすることを促してあげてください。大人から見れば大したことがない造形物であっても、子どもたちにとっては、自分自身で作り出した、大切な「遊びの素材」です。

ひねもすで、一生懸命に棒を作って、「剣ができた！」「これは魔法の杖なの！」と言って誰かといっしょに遊ぶ。粗い情報である造形物から、想像して詳細なモノに見立てる。そして、見立てたモノを使って空想の物語が生まれる。生来人間が持っている、見立てるチカラと物語るチカラ。二つのチカラは、社会生活の中で非常に重要な作用をもたらすと感じています。

しかも「少し我慢して、少し苦勞して、自分で作ったモノ」は、本人にとっては、「特別なモノ」として目に映るはず。また、友達同士、あるいは、親子間で、作ったものを見せ合うことでより新たな創意工夫も生まれることでしょう。そして、そのような「いっしょになって楽しみ、対話を通して創造し、実際に手を動かして試行錯誤しながら培った達成感」の記憶が、子どもたちの中に、家庭の中に、あるいは、教育の場に残っていくことを願って、この商品を世に送り出します。

子どもたちの健やかな発育が、ひいては昨今の社会問題解決の一助となることを信じております。

## 「入会申し込み」

パンフレットを参照の上、氏名、希望クラスを明記し、現金を添えてお申し込み下さい。

フリーダイヤル：0120-07-3201(携帯・PHS・公衆電話OK) FAX：075-781-6073

電子メール：taro@kitashirakawa.jp (折り返しお返事します)

住所：606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町41 北白川幼稚園「山の学校」宛